

## アレルギー疾患の理解を深めるための事例の作成と 教職大学院での展開

石原研治\*\*\*・鈴木美香\*\*・寺門遼香\*\*・福田珠巳\*\*・瀧澤利行\*\*\*

（2022年8月31日受理）

## Discussion of the Cases for Allergic Inflammation suffering from Students by Graduate School Students

Kenji ISHIHARA\*\*\*, Mika SUZUKI\*\*, Haruka TERAKADO\*\*, Tamami FUKUDA\*\*, Toshiyuki TAKIZAWA\*\*\*

（Accepted August 31, 2022）

### はじめに

文部科学省では、平成16年度の全国調査に基づき平成19年にまとめた「アレルギー疾患に関する調査研究報告書」<sup>1)</sup>をもとに平成20年に「学校のアレルギー疾患に対する取り組みガイドライン」<sup>2)</sup>を公表し全国に周知していた<sup>3)</sup>が、平成24年には東京都調布市でチーズ入りチヂミを食べた小学生がアナフィラキシーショックにより亡くなった<sup>4)</sup>ことは記憶に新しい。本件では、様々な要因が重なったが、緊急時の対応として担任や養護教諭のアレルギー疾患に対する認識と意識の欠如等が指摘された。一方、先行研究では、小学校の学級担任の多くは食物アレルギーの発症時の症状と対応に不安を持つこと<sup>5,6)</sup>が示されており、また、教員養成課程に在籍する大学生において一般教諭を志望する学生のアレルギーに関する理解度は低い<sup>7)</sup>。一方、食物アレルギーの子どもの母親は直面した不安や困難感を持ち、情報の入手、症状出現、治療負担、学校や周囲の理解<sup>8)</sup>、除去食に関するストレス<sup>9)</sup>がある。さらに、「平成25年度学校生活における健康管理に関する調査事業報告書」<sup>10)</sup>によると、全国の児童生徒のアレルギー性鼻炎、アレルギー性結膜炎、食物アレルギー、アナフィラキシーの罹患者数と割合が平成19年の調査と比べ増加していた。学校におけるアレルギー疾患への対応は食物アレルギー・アナフィラキシーに焦点を当てられることが多いが、アトピー性皮膚炎<sup>11)</sup>、花粉症<sup>12)</sup>などでも子どもたちは様々な悩みを抱えている。

以上のことから、学校現場でのアレルギー疾患への対応や取り組みは十分とは言えず、また、教員を志望する大学生の理解も不十分であると考えられる。そこで、本研究では、アレルギー疾患に関する事例を作成し、教職大学院の3つのコースに在籍する大学院生による事例検討を通して、大

\*茨城大学教育学部教育保健教室（〒310-8512 水戸市文京2-1-1；College of Education, Ibaraki University, Mito 310-8512 Japan）.

\*\*茨城大学大学院教育学研究科（〒310-8512 水戸市文京2-1-1；Graduate School of Education, Ibaraki University, Mito 310-8512 Japan）.

大学院生がアレルギー疾患の理解を深め、児童生徒への支援や相互の連携を図る方法を見出し実践につなげる方法としての有用性を検討することを目的とした。

## 方 法

### 1. 研究対象

アレルギー疾患に関する学校での取り組みに関する理解を深めるための事例を作成し、本学教職大学院の1年次学生に事例に対する対応を検討してもらった。対象は教科領域コース（17名）、特別支援科学コース（3名）、養護科学コース（3名）、その他（1名）の計24名である。また、男性（12名、50.0%）、女性（11名、45.8%）、その他（1名、4.2%）であった。これまでのアレルギー罹患児への対応経験は、18名（75.0%）が「ない」であった。

### 2. 実施時期

調査期間は2021年10月から11月である。

### 3. 事例の作成

アトピー性皮膚炎、花粉症についてそれぞれ事例を作成した。

### 4. 調査方法

大学院生をグループに分け、作成した事例について調べ学習や検討の後にグループ発表を行った。その後、事後の質問紙調査を実施した。3コースの学生が偏らないようにグループ分けを行った。

### 5. 倫理的配慮

質問紙には、調査の目的と概要、無記名・自記式で行うため個人が特定されることはないことを記載した。

## 結 果

### 1. 事例

アレルギー疾患として、アトピー性皮膚炎、花粉症に関する以下のような事例を作成した。

#### 1-1. アトピー性皮膚炎

小学6年生のさくら（12）はクラスでも明るくクラスの誰からも好かれ、勉強と習い事のピアノは常に優秀な成績だった。将来は医師か薬剤師となり病気で困っている人を助けたいと考えていた。学校ではリーダー的存在であったさくらだが、小学校最高学年になった今年、いつ考えても憂鬱になる行事、修学旅行があった。修学旅行を1ヵ月後に控え、学年集会でその説明があった。2泊3日の修学旅行、さくらは泣きながら職員室にむかった。

「先生、私、修学旅行に行きたくないです。だって、みんなと一緒にお風呂に入り、私の体、

肌、みんなに見られたら…。でも、みんなと修学旅行に行って楽しい思い出を残したいという気持ちはあるのです…。先生、ずっと担任をしてきてくれたから私がアトピー性皮膚炎で苦しんでいたこと知っていてくれていたでしょ。先生、ずっと応援してくれていたからこれまで学校では泣かないって決めて頑張ってきたの。」

## 1-2. 花粉症

中学2年を終えようとしていた3月はじめ、学級委員の健太(14)と美咲(14)は担任のもとに向かった。

「先生、私たち、クラスの雰囲気をなんとかしたいという気持ちできました。」

「最近、授業中にくしゃみをしたり、鼻をかんだりする音がとても気になるし、ゴミ箱はティッシュの山、たまに床にまであふれていたりして不衛生です。」

「毎年のことだし、花粉症だってことはわかるのですが、クラスの1/3がこんな状態で何もなしから不満が出ています。薬を飲んでくれればこんなことにならないのではないのかな。」

「それに、来年は受験生だし、先輩の姿をみていると勉強を頑張らなきゃって思うのですが、大輔くん、将来、弁護士になりたいって言っていたのに、最近、『疲れた』を連発しているし、居眠りばかりしています。どうしちゃったのだろう。こんなんでもいいの？もっと集中して欲しいです。」

「僕らみんなで志望校合格を目指したいのです。先生だってみんなで頑張ろうって言ってくれたじゃないですか。」

## 2. 担当した事例について

担当した事例を検討する上での難易度を尋ねたところ、約4割が「易しい」と感じていた。一方、約6割が「難しい」と回答した。その理由を表1に示したが、易しかった・少し易しかった理由として、「場面設定が明確であった」「担当事例に関する基本的な知識があった」「身近な疾患であるため考えやすかった」などが挙げられ、一方、難しかった・少し難しかった理由として、「経験がなかった」などが挙げられた。

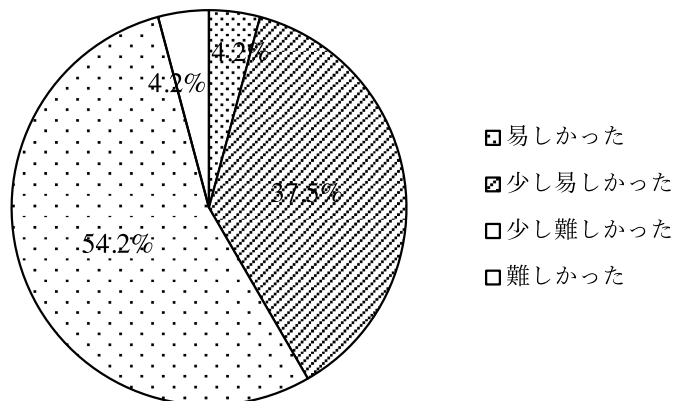


図1 担当した事例の難易度

表1 担当した事例の難易度の理由

易しかった・少し易しかった理由
・場面設定が明確であったから（3名）
・担当事例に関する基本的な知識があったから（3名）
・身近な疾患であるため考えやすかったから（2名）
・自身の罹患歴をもとに考えることができたから（1名）
難しかった・少し難しかった理由
・経験がなかったから（6名）
・どの程度の配慮が必要かわからなかったから（1名）

### 3. 3 コースの学生による事例検討の効果

3 コースの学生での検討を通して、事例に対する受け止め方や考え方に違いがあると感じたかについて尋ねた。その結果、6割以上の学生が「違いがある」と感じていた。その理由として、3 コースの学生の違いを感じ連携の大切さや現場経験のある現職の先生の考え方から多くを学んでいたようである（表2）。

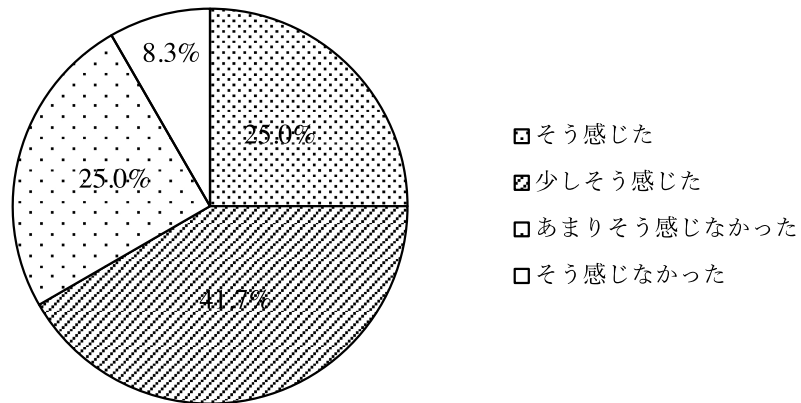


図2 3コース学生の受け止め方・考え方の違い

表2 3コース学生の受け止め方・考え方の違いの理由

<p>そう感じた・少しそう感じた理由</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・専門的な視点からの意見は同コースだけでは出なかったと思う。配慮例の具体性が高まったから (1名)</li> <li>・養護や特支の学生の意見は自分の視点より広いように感じたため (1名)</li> <li>・教職員で協力するためには自分自身の視野をもっと広げる必要があると感じたため (1名)</li> <li>・自分が思っていた以上に学級担任と養護教諭の連携が重要であることがわかったため (1名)</li> <li>・現職の先生はより現場の視点で発表内容を捉えていたと感じたから (3名)</li> </ul>
<p>あまりそう感じなかった・そう感じなかった理由</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・各自の基礎的な知識に差はあっても当該児童生徒の苦痛を軽減することと周りの児童生徒への配慮を行うことについての根本的な考え方にあまり違いを感じなかったため。(1名)</li> <li>・全員実際にアレルギーに対応した経験が少なかったため (1名)</li> </ul>

図3に示すように、全員が本事例を通して考えが深まったと回答した(図3)。その理由として、コース間での討論、現職の先生を含めた討論を挙げた者が多かった(表3)。また、対応に重点を置いた視点から罹患児の気持ちへの視点の変化を挙げた者もいた(表3)。

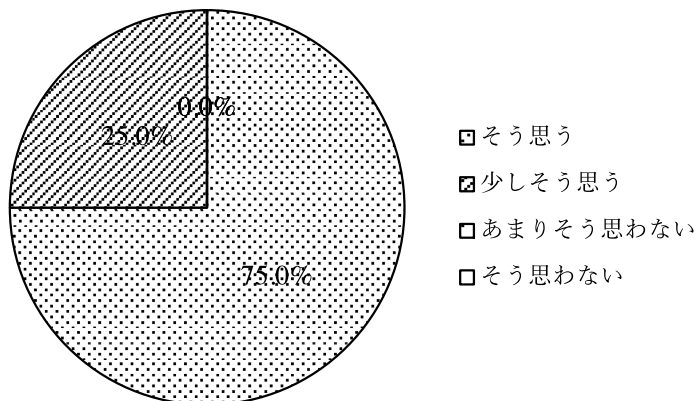


図3 事例検討を通して今までの考え方が深まったか

表3 事例検討を通して今までの考え方が深まったかの理由

そう思う・少しそう思う理由	
・さまざまな教科や領域の院生と話し合うことで多様な視点で考えることができたと思うため	(9名)
・現職の先生から現場の視点を学ぶことができたため	(4名)
・ただ対応するだけでなく対応される側の気持ちを考える視点を得たため	(4名)

本事例検討を行ったことで、勤務した際にアレルギーに関する指導を自ら行えると思うかについて尋ねたところ、「そう思う」と回答した学生は8.3%であり、「少しそう思う」が50.0%、「あまりそう思わない」が41.7%であった（表4）。その理由として「実践が不足していること」を多くの者が挙げており、勤務後も継続して学ぶ機会が必要であることが示唆された。また、全員が「アレルギーの知識は必要」「学校内外での連携が必要」と回答した（data not shown）。

表4 勤務した際にアレルギーに関する指導を自ら行えると思うか

	n	%
そう思う	2	8.3
少しそう思う	12	50.0
あまりそう思わない	10	41.7
全くそう思わない	0	0.0
合計	24	100.0

## 考 察

本研究では、アレルギー罹患児を理解するための事例を作成し、事例検討を行うことで大学院生の新たな視点や連携の重要性の認識を指向し以下の4点を明らかにした。

- (1) アレルギー疾患の中で「アトピー性皮膚炎」「花粉症」について事例を作成した。
- (2) 3コースの学生で検討することによって、大学院生は事例に対する受け止め方や考え方に違いがあると感じ、その広がりや深まり、連携の有意性を認識できた。
- (3) 本事例だけでは現場での対応の自信にはつながらず、やはり実践の必要性を感じていた。
- (4) 現職の先生が討論に加わることで、現場の視点を加えることができた。

現在、学校では、令和元年度に改訂された「学校のアレルギー疾患に対する取り組みガイドライン」<sup>13)</sup>をもとに取り組みを進めており、そのポイントとしては「各疾患の特徴をよく知ること」「個々の児童生徒等の症状等の特徴を把握すること」「症状が急速に変化するを理解し、日頃から緊急時の対応への準備を行っておくこと」の3点が挙げられている。アレルギー疾患は罹患児一人ひとりについてアレルゲンや重症度、症状の現れ方が異なるため、ポイントに掲げられているよ

うに疾患について理解するだけでなく、児童生徒等の症状等の特徴を把握することが大切である。

アトピー性皮膚炎の事例については、筆者の経験をもとに作成した。以前、在籍していた研究室では、アレルギーの原因を解明し創薬に結びつけることを目標にしていたので、配属を希望する学生のはほとんどはアレルギー疾患を有する学生であった。ある年、恒例の研究室旅行（2泊3日）を計画していた時、アトピー性皮膚炎の女子学生が事例にあるような理由で行きたくないと申し出た。食物アレルギー、花粉症、アトピー性皮膚炎など重症な罹患者がたくさんいる研究室であり、その学生がアトピー性皮膚炎であるということは誰もが知っていたがやはり旅行は不参加であった。きっとこれまで長い間の経験や出来事などから、楽しい行事、居心地の良い仲間とはわかっているも「やはり行けない」ということだったのだろうと思い、そのような気持ちを汲む事例を作成した。一方、これまでの我々の研究結果<sup>13)</sup>では、小・中学生は友人といるときに罹患児・健常児双方ともにアレルギー症状を「気になり」「知りたい」と考えているものの、罹患児は「ストレスを感じ」てしまうことが明らかになっており、症状を理解し心身の支援が必要になると思われる。

花粉症については、アレルギー疾患の中でも有病率が高く、近年、春先になると天気予報でスギ花粉の飛散状況や薬のCMなど、一般的になじみがあるアレルギー疾患であるが、その「知っている」ということが、罹患者（児）の症状や副作用を気づきづらくしていることがあるのではないかと思い作成した。花粉症はくしゃみ・鼻水・鼻づまりが主症状でありこれらは誰もが理解できる症状であるが、それらが止まれば健常者（児）と同じになるのではない。その例として事例では大輔を登場させた。事例には大輔は花粉症であるとは書いていないが、大輔を通して、花粉症の時期の疲れた、眠い、居眠りは、症状による疲れと薬の使用の結果である可能性もありうるということにも目を向けられるような支援につながるようにした。これはガイドライン<sup>14)</sup>の「アレルギー性鼻炎」の「学校生活上の留意点の欄の読み方」にも記載されている。しかしながら、事例による討論ではそこまで考えが至らず、大輔の登場理由について中途半端になってしまっていたようで、この点は改善すべき点であると思われる。

本事例を通して、大学院生は、教科・特別支援・養護教諭のそれぞれ大学学部時代に学んできた立場や学修背景から討論を行うことで、3コース学生の受け止め方・考え方の違いを感じ（図2）、今までの考え方が深めることができた（図3）と回答していた。これらの結果は、アレルギー対応のみならず現場に出た時の様々な連携力につながるのではないかとと思われる。そして、教職大学院には大学を卒業して現場経験のない多数の大学院生とともに現職の教員が入学し共に学ぶため、現職の教員の視点も同時に学ぶことができたようである（表2,3）。しかしながら、勤務した際のアレルギーに関する指導の自信にはつながっておらず（表4）、実践の必要性を感じていた。

以上の結果から、本研究で作成した事例を用いた検討では、大学院生が一人ひとりの考え方の違い、視点の広がり、連携の大切さなどを感じ、しかし、本事例のみで実践的な自信がつくものではないことも同時に明らかになり、現場では児童生徒への支援を積み重ねつつ、その一つひとつの支援での連携の視点にその有用性を見出すことができたのではないかと考えられる。

## 謝 辞

本研究は日本学術振興会学術研究助成基金助成金基盤研究（B）（課題番号 21H00854，研究代表者：石原研治）の助成を受けて行われた。

## 引用文献

- 1) アレルギー疾患に関する調査研究委員会「アレルギー疾患に関する調査研究報告書」  
<https://www.gakkohoken.jp/uploads/books/photos/v00057v4d80367f62adc.pdf> (2022年8月17日閲覧).
- 2) 財団法人 日本学校保健会. 2008. 「学校のアレルギー疾患に対する取り組みガイドライン」文部科学省 スポーツ・青少年局 学校健康教育課 監修.
- 3) 文部科学省「学校のアレルギー疾患に対する取り組みガイドライン」について」  
[https://warp.da.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/11402417/www.mext.go.jp/b\\_menu/hakusho/nc/1291672.htm](https://warp.da.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/11402417/www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/nc/1291672.htm) (2022年8月17日閲覧).
- 4) 調布市立学校児童死亡事故検証委員会「調布市立学校児童死亡事故 検証結果報告書概要版」  
[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/sports/018/shiryo/\\_icsFiles/afieldfile/2013/06/05/1335638\\_5.pdf](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/sports/018/shiryo/_icsFiles/afieldfile/2013/06/05/1335638_5.pdf) (2022年8月17日閲覧).
- 5) 佐久間瑞恵・市川幸子・柏光佐子・石原研治. 2012. 「食物アレルギーに対する学校での対応と情報収集システムの構築」『茨城大学教育学部紀要』61, 299-317.
- 6) 端山淳子・松木秀明. 2017. 「小学校教員の「食物アレルギー児対応に関する不安」の構造と影響要因の検討」『日本小児アレルギー学会誌』31, 268-279.
- 7) 渡邊菜々子・石原研治. 2020. 「教員を志望する学生の食物アレルギー・アナフィラキシーに関する知識や理解について」『茨城大学教育学部紀要』69, 317-326.
- 8) 池田有希・今井孝成・杉崎千鶴子・田知本寛・宿谷明紀・海老澤元宏. 2006. 「食物アレルギー除去食中の保護者に対する食生活のQOL調査および食物アレルギー児の栄養評価」『日本小児アレルギー学会誌』20, 119-126.
- 9) 八尾坂志保・小林恵子. 2018. 「食物アレルギーの子どもの母親が養育上直面する問題と対処行動」『日本公衆衛生看護学会誌』7, 23-31.
- 10) 公益財団法人 日本学校保健会「平成 25 年度学校生活における健康管理に関する調査事業報告書」  
<https://www.gakkohoken.jp/books/archives/159> (2022年8月17日閲覧).
- 11) 片岡葉子・吹角隆之・遠藤薫・檜澤孝之・青木敏之. 1999. 「アトピー性皮膚炎と不登校，いじめ」『アレルギー』48, 272.
- 12) 石原研治・海老沢幸恵. 2019. 「アレルギー性鼻炎理解のための罹患者と健常者のコミュニケーションの在り方」『茨城大学教育学部紀要』68, 379-386.
- 13) 氏家七海・石原研治. 2020. 「アレルギー疾患を持つ児童生徒への学校生活における理解と配慮」『茨城大学教育学部紀要』69, 305-316.
- 14) 公益財団法人 日本学校保健会. 2020. 「学校のアレルギー疾患に対する取り組みガイドライン《令和元年度改訂》」文部科学省 初等中等教育局 健康教育・食育課 監修.